

市民談話室

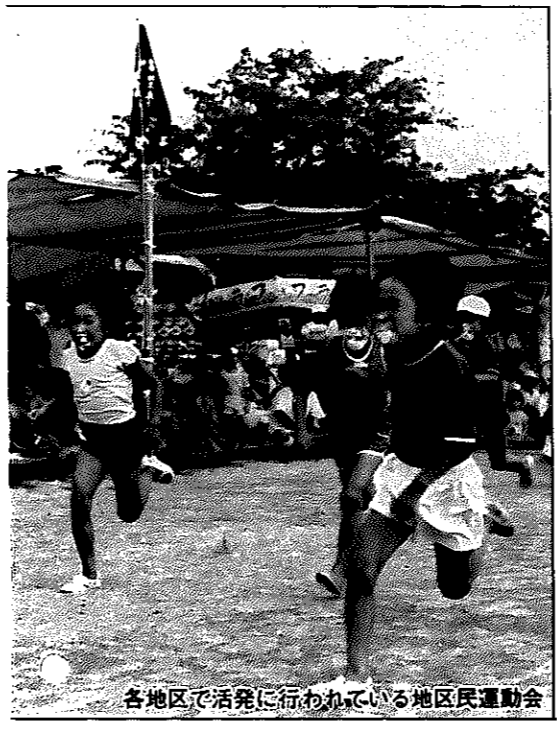
投稿ください。市民の皆さんの意見交換の場がこの市民談話室です。テーマは自由です。あなたの意見を気軽に寄せてください。採用文には謝辞を差し上げます。紙面の都合上、文を短くすることがあります。あて先は、大字白根二三五 白根市役所企画財政課広報広聴係です。

汗を流した一日に思う

地区民運動会で明日の地域へ

高橋末江さん (西笠巻新田・着付師・55歳)

八月七日、三十五度を超す猛暑の中で、これぞ一丸となって正々堂々と戦う地区民運動会。全部落あげて、老いも若きも子供も、また関係当局の親身な協力をいただいてやれる行事の楽しさは、すばらしいものである。ジワジワなどというものもなく、滝のごとく流れ落ちる汗を物ともしない参加者一同の目の輝きとがんばり様は、この時



各地区で活発に行われている地区民運動会

ならではの光景です。これこそ地区民の和でなくて、なんでもりましょう。

私は、ふと考えました。戦前の農村特有の人情味も、今や消え去ろうとしている時、この閉結、連帯、人情味をすべての所に生かし、社会問題に大きく取りあげられている非行を出さない、明日への地域づくりの糧としたいものです。どうか、この

譲り合う

相手の立場を考え円満解決を

長沢一衛さん (戸石新田・農業・76歳)

争いごとの円満解決は簡単であると同時にまた、はなはだ難しいものです。それにはまず、何事によらずお互いに譲り合うことが大切です。相手方とよく話し合い、相手の気持ちになつてお互いに少しづつ譲り合えば大体のこと、否、すべてのことが円満に解決できると信じます。

また、一歩も譲り合いができない場合は、はなはだ困難な道に落ち入り、時には裁判にまで発展し、受ける被害はお互いに大きなものとなります。雇用主は雇われる人の気持ちになり、雇われる人は雇用主の責任と和

家庭は子供の人間形成の場

野内熊太郎さん (砂押・無職・61歳)

一か月余りの夏休みも終わりました。子供たちにとっては、自由な生

私のひとこと

白根市にぜひとも欲しい大工場

小熊スミさん (中塩俣・主婦・51歳)

市内の国道八号線を通ると、実に見事。色さまざまな建物が私の目を惹きつけてくれる。ちよっと、ドライブ気分。が、



何か一つ物足りない気もする。それは、壮大な工場が見えないせいだろうか。もし、そんな大工場でも見えたなら、どんなにすばらしいことだろう。その工場が、市内の青壮年者が一心に働けたら、どんなに幸せだろう。今や、農業も大型化され、農業に見切りをつけて、一人息子を都会に送り出す農家も少なくないと思います。とても淋しいことです。白根市にぜひ、ぜひほしい大工場。

コ/ミ/ュ/ニ/テ/イ

ひろば

活から再び規則的な学校生活が始まりました。夏休み中は子供のつきあいで気疲れしていた親たちも、ほっと一息つく気持ちではないかと思えます。

しかし、青少年少女が一番非行に走りやすいのは、夏休みの終わりの九月のことです。人は生まれて三か月で七〇%の人間形成ができると聞きました。いかに家庭という環境が大切であるかが、わかります。

子供の心の中が家庭の出来事についていかに、学校へ行っても勉強が頭に入らないような雰囲気は避けたいものです。学校は家庭と違って、さまざまな性格を持つ子供たちの集まりで

す。物が栄え、心が減ることのないよう、体と心を鍛える努力をしたいものです。

それにはまず、父母の和が第一と思われたい。男女同権といつても、それぞれ立場があるはず。「私も働いているから」と男女にかかわらず自由気ままに放つて置けば、家庭など染けないばかりか、子供の心にも針のささったようなつらい思いをさせます。それが横道にそれる原因にもなります。

何はともあれ子供が一人前になるまでは、父母の責任は大きいものです。目的の地につくまで親が船頭となり、かじを取つていかなければなりません。

市民文芸

俳句

畦端の稲から黄ばみ今朝の秋
芒野の白き日に増し秋立ちぬ
農道の端から秋の立ち初めり
読みにくい孫の便りや空澄める
秋に入る寡婦の乳房の太きまま
鳥おどし一段高く秋立ちぬ
脛の毛の廊下往来に秋を知る
秋祭り日焼けし孫のよばれて来
扇風で盃重ねる宵祭り

坪川桐太郎
針貝 静男
中山 義英
桑原 平一
石田 豊実
田中 昭一
真保 清三
佐野 竹子
牛腸 七郎

川柳

秋立ちて翁一人の畑忙し
立秋は名のみ戻って来し梅雨
良寛の山にも一ツ秋の蝶
秋晴れやくつきり見ゆる佐渡の山

貧欲な頭にのせておく辞典
寄村帳のトップ草書で書くゆとり
ジョギングの足は記録を意識せず
履歴書は要らぬ小さな町工場
病室でおしんばかりがもてている
苦しさを分けた魚の目今朝袂別れ
ヘソクリを見られて口止め料とられ
流行については行けぬ地味な妻

佐藤勇一郎
須戸 義夫
玉木 長吉
大旗 豊治
今井 七郎
吉川 彰
長井 徳市
後藤まさの
田村 恒夫
竹石 甚五
織田 セツ
佐藤トミノ

短歌

綱つけて錦を飾る郷土入り
子供の目とらえるランチの飾りつけ
切り替えのきかめ頭をもて余し
隠居部屋建てて息子と遠くなる
ほうせん花はじけた殿はふりむかず
皇居よりお先に美味しコシヒカリ
娘に送る箱のゆとりヘコシヒカリ
みよがしのサラ金チラシ切り捨てる

物想う夜の末だに明けやらぬ
日暮しの声秋に迫りて
夏衣一枚ほしと願うまに
はや秋風の立ちし此の朝

米野 光雄
岡村 清
吉川 末吉
山岡 フミ
西条 ムラ
中村 尚治
高橋祐四雄
大井 義雄

中村 京
小林キミイ



町内の人たちがやきそばやこんにやくをつくって、子供たちに食べさせてくれます。また、お寺で映画会もあります。

下町も子供が少なくなつたけど私たちが昔のよい伝統をうけついでいきたいと思えます。

からくどう



庄瀬小学校6年 石田 薫さん

私たちの町内の行事は、毎年八月二十六日に「からくどうまつり」をします。このまつりは、市の開かれるのを祝って昔からやってきたのだそうです。

その日は、お寺の石碑の前に鉄骨で骨ぐみし、紅白まくをはり、堂をつくります。市にきた人は、商売がうまくいくようにと、おせいおまいりしてくれます。夜は



ぼくたちわたしたちの部落・町内会

庄瀬下町
世帯数 36世帯
人口 160人(男75人 女85人)
(9月1日現在)